様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	言語系コース（英語）／前田一平

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1．目標・計画

新学習指導要領は思考力および表現力を育成するために、すべての教科において言語活動を行うよう求めている。アメリカ文学を専門とする立場から、三つの観点について以下のように目標を定める。
①「他者を慮る心」を思考力と表現力のキーワードとしてアメリカ文学の授業を実践する。
②自分中心ではなく、常に他者（物語の登場人物、主人公であれ脇役であれ）の感情と思考に寄り添って考える姿勢を受講生に求める。
③授業実践に合わせて、作中人物の言動と行動としぐさの理由を「なぜ」と問う設問の筆記試験あるいは課題論文を課す。思考力豊かな内容を適切に表現できているかを評価基準とする。

2．点検・評価

①中間報告にもあるように、大学院および学部の授業で思考力と表現力を養成するべく工夫をした。英語テキストに描かれている物語を説明させ（物語の筋を理解できない、あるいは説明できない学生が増えているので）、登場人物のしぐさや描かれていない事柄の意味を推測させ思考させ表現させる授業を意図的に実践した。しかも、このような授業は受講生に非常に評判がよかった。
②上記授業内容の鍵となる読解力の基本精神は他者を慮る姿勢である、と受講生には言い聞かせた。学校のクラスには三十数人の児童・生徒がいるわけだが、それぞれの子どもがひとつひとつの物語であり、先生は三十数個の物語を読む優れた読者でなければならない、と主張し、それを授業で実践した。
③通常の知識や記憶を問う筆記試験も、漫然としたレポートも課さなかった。米国の学校で使用する正式の言葉 ″Term Paper″が意味する課題研究報告を課し、複数の課題を前もって与え、授業の進行に合わせて記述させる方法をとった。それにより、ノート取りをしない・できない学生が授業で学んだことを記憶が新しいうちに文章に表現して残す、という学習の実践につながった。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①ゼミ生を中心に教員採用試験合格に向けて支援し、卒業論文および修士論文の作成との両立に細心の配慮をして指導する。
②留学の意義を説き、様々な留学の機会を紹介し、留学に関して腰の重い本学学生に留学に向けて背中を押す。
③ゼミ生を中心に、学生の生活全般にわたって配慮を怠らず、学生が相談をしやすい教員であるよう心がける。

2．点検・評価

①ゼミで卒論指導2名とL2の院生2名にはそれぞれ週1回、主産育児で休学中のL2の1名にはe-メールで指導をした。学部ゼミ生2名には、要望に応えて夏休み期間もゼミを実施した。また、この2名にはリメディアル教育として、大学入試レベルの英語参考書を使って、英語の基本を再学習させた。熱心であったこの2名は、愛知県高等学校英語に正採用、京都教育大学大学院（地元）に進学という結果であった。
②ゼミや授業を通じて留学の意義を説き、消極的であったり不安を感じたりする学生の背中を押した。結果、オーストラリアの高等学校に日本語助手として、またアメリカの協定校への留学として学生を送り込んでいる。ただ、TOEFLなどの英語検定試験の成績が芳しくないので、基本的な英語力向上の指導をする必要性を感じた。
③ゼミ生とは研究室で相談を受けたりe-メールで頻繁に連絡を取り合ったりして、論文作成や進路指導など学習から生活全般にわたって配慮した。学生が相談しやすい環境や関係作りを心掛けた。ゼミの忘年会や昼食あるいは映画鑑賞会なども行い、学生生活が豊かになるよう工夫した。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

①ヘミングウェイ研究は「老い」をテーマに研究仲間と研究を進めている。それを共著書として出版するための準備をする。
②日系アメリカ文学研究をシアトルからハワイ、特にハワイ島のヒロに場所を移し、新たなリサーチ・フィールドを開拓する。
③上記二分野の学会である日本ヘミングウェイ協会とアジア系アメリカ文学研究会で学会運営と研究に積極的に携わる。

2．点検・評価

①研究仲間と共著書『ヘミングウェイと老い』（松籟社）を11月に出版した。その中で「小学校6年生の『老人と海』」と題して、同小説に見られる作家ヘミングウェイの老いを検証した。また、「ヘミングウェイと伝記」というテーマで共同研究を進めており、平成26年中に共著書として出版する予定である。
②懸案であるハワイの日系人研究は進捗状況はよくない。大学院のゼミ生とハワイ日系人文学を研究し、ハワイ文学が専門のスティーブ・スミダ（ワシントン大学）教授とは常に連絡をとり、スミダ教授およびノムラ教授には8月に再会した。しかし、研究基盤がまだ整っていない。ただ、8月1、2、3日に広島で開催された日系アメリカ人による英語朗読劇lBreaking the Silenceの日本語朗読者として参加するよう要請を受け、日系アメリカ人の人権問題や広島の平和活動に貢献できた。
③日本ヘミングウェイ協会の事務局長・評議員として、日本アメリカ文学会の大会運営委員として、中・四国アメリカ文学会の評議員として、日本英文学会中国四国支部の理事として、アジア系アメリカ文学研究会の役員として学会運営に携わった。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

①人文・社会系教育部長の2年目に責任をもって対処し、同教育部および本学の運営に尽力する。
②教授としてコース運営にも責任を持ってあたる。

2. 点検・評価

①人文・社会系教育部長として微力ながら、無難に大役を果たすことができた。
②所属コースの人事2件の副査となるなど、コースの教授としても尽力した。
③年度末には大学改革構想検討委員会の委員として、苦手な分野の仕事ながら、大学の将来計画に携わった。
④昨年3月末に別府大学で本学大学院説明会を開催したが、参加学生の中から本年度の大学院入試を受験した学生がいた。入学予定である。ささやかながら、大学運営に貢献できた。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携，国際交流等

1. 目標・計画

①例年と同様、附属学校における教育実習を観察し、学生に指導助言をする。同時に附属教員との交流を図る。
②社会との連携については他大学の講師や教育支援講師として依頼があれば積極的に応じる。
③国際交流としては、学生に留学を奨励する。

2. 点検・評価

①学部3年生の教育実習を観察するために附属中学校に赴き、研究会で指導助言をした。L2ゼミ生の実習観察のために、北島中学校と北島北小学校に赴き、それぞれ校長および担任教諭と面談し、実習生および学校問題などについて話し合った。
②徳島大学全学共通教育と総合科学部で非常勤講師を務め、9月には高知大学人文学部で集中講義を行った。高知大学では30名を超す受講生（2年次、3年次が中心）に本学大学院のパンフレット等を配布し説明紹介を行った。
③国際交流としてはⅡ-1にあるように学生に留学を推奨し結果を得たことと、米国シアトルの劇団Readers Theaterによる朗読劇"Breaking the Silence"（於、広島市留学生会館、観客数およそ100名）の日本語リーダー（朗読者）として要請され舞台に立ち、国際交流および人権と平和問題に貢献できた。パンフレットには私の氏名と鳴門教育大学名が記された。

Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）

人文・社会系教育部長として、数々の会議に出席し、無事に職務を終えたことが唯一の特記事項です。